

台湾演奏修学旅行の実践報告

——本校初の海外演奏修学旅行の成果と課題——

沼田 宏行

I. はじめに

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校（以下本校）では、すべての生徒が音楽を専攻している。生徒の9割が洋楽を専攻としており、1割が邦楽を専攻としている。かつて修学旅行は、普通高校同様に国内で、しかも航空機を使用しない範囲での社会学習を含むもので行われていた。しかし、世の中の変化に伴い、国内でも航空機の使用が認められ、修学旅行の内容も変化を遂げてきた。

近年、本校では修学旅行においての特色を得られるよう、社会学習を一步進め、修学旅行中に演奏を取り入れることを行ってきた。国内では、その経験を積み重ね、単に本校が演奏するのみならず、訪問する相手校と共同作業をすることにより、より大きな成果を挙げてきている。その経験値を踏まえ、近年の社会的変化、グローバル化に対する要求が高まってきたと同時に、経済的なハードルも低くなってきたことにより、平成27（2015）年度に本校初めての海外演奏修学旅行を行うことが出来た。その実践と問題点をここに記載する。

II. 海外演奏修学旅行を行う動機

海外演奏修学旅行が実現するに至った理由は、以下の5点にまとめられる。

1. 演奏旅行に対するもの

本校は既に何回か、オーケストラとして、また合唱を伴ったオーケストラとして地方団体や学校に招かれて、校外演奏会の経験を積んでいる。ただし、その規模や予算等は、いつも本校側の望む条件とは限らなかった。オーケストラのみの場合は宿泊を伴うことも可能であるが、それでは限定された生徒のみの参加となる。また、合唱を伴う場合は予算の都合で日帰りを余儀なくされ帰宅時間が遅くなる等、条件が整わない状況であった。

2. 他校の動向

修学旅行において、以前は東京都公立高校の規定に準じた予算や移動制限に縛られていた。しかし、近年の私立および公立音楽高等学校の動向に鑑みると、修学旅行の条件を独自に検討する余地が見出された。私立音楽高等学校では、語学研修など音楽とは直接関係のない修学目的で海外修学旅行を行う学校が多く見られたが、近隣の公立芸術系コース高等学校における音楽演奏（必ずしも音楽専攻とは限らない）を伴う海外修学旅行には大きく影響された。

3. 経済的な問題の解決

経済的な問題が解決しやすい社会情勢になり、円の海外相場の安定的発展から、航空運賃および海外での宿泊費を含む諸経費が、海外修学旅行を実現可能な範囲に変化した。国内修学旅行において航空機を利用した場合と比較しても、みかけ上の価格は2倍を超えないものとして認識された。対経済的効果を考えた時、海外修学旅行も十分考慮のうちであるという認識が浸透してきた。

4. 本校生徒及び教員の希望

生徒9割以上が洋楽を専攻とするものであり、その発祥の地を訪れることを望んでいる。また1割の邦楽を専攻する生徒も海外での邦楽の在り方に興味を持つものが大半であることがわかった。更に、世の中ではグローバ

ル化が進み、世界を知ることを通して自分自身を見直すことの大切さが再確認されてきた。

5. 管理職および運営委員会の海外修学旅行への認識変化

本校を運営する運営委員会の海外留学に対する考え方が変化してきたことに加え、生徒の自主的な海外渡航の頻度が、多くなったことが海外旅行届やコンクール出場願などからはっきりとした数字で確認できるようになった。そこから海外演奏修学旅行開催の可能性を議論できる土壌が整ってきた。

上記5点により、本校職員会議の意向を受け、本校運営委員会が海外修学旅行の開催を決定し、以下の条件が付けられた。

- 経済的理由、および緊急時の対応等を考え、アジア近隣諸国（韓国、台湾、中国など）において行うこと。
- 次回以降を必ず海外修学旅行とするものではなく、これからの海外修学旅行のパイロットケースとして試行するものであること。

III. 海外修学旅行準備開始と担当教員

2013年10月の本校運営会議の決定を受け、海外修学旅行の準備が始まった。本校の国内での修学旅行と同様に担任が中心となったが、今回は特に初めての海外ということで、担任のみで計画を行うのではなく、チームを結成し、多くの困難に対して万全の態勢で臨んだ。担任（ピアノ科）の他、音楽科教員2名（作曲科、弦楽科）、養護教員1名の計4名でチームを作り検討を始め、管理職としてこれに副校長が加わり、合計5名で修学旅行を開催した。

IV. 準備の進行と問題点

以下、具体的な準備の進行と問題点を明らかにする。海外旅行の常で、日本の社会常識が通用しないだけでなく、航空業法や、各国の国税および保安基準などにより、用意または注意しなければならないことが、行動ごとに明らかになっていく。最初から、すべてが予測できる状況とはおよそ遠く、なおかつ本校初の海外修学旅行であることを考え合わせると、当初より多くの困難が予測された。

1. 訪問校の選定

(1) 選定の際の条件

運営委員会の決定を受け、アジア諸国より訪問校の選定を始め、台湾を訪問することが決定した。台湾の交流相手校との交渉を開始するにあたり、本校の活動条件を設定した。それをもとに相手校を探し、更に活動条件が互いに合致しているかどうかを確認した。

(2) 相手校との交渉の開始

調査の結果、台湾台北の中正高級中学（日本の学制では高等学校に相当）が候補に挙がった。中正高級中学では、本校と同規模の音楽科の生徒が勉学に励んでいる。楽器に対する教育、音楽関連科目におけるカリキュラムは、本校同様専門的なもので、特に専攻楽器については高い技術を持っており、共同演奏や生徒交流を行った際、効果が非常に高く得られるということが推測され、有力な候補となった。他の学校も検討されたが、経済的な条件等も考えあわせ、交渉を開始するに至った。交渉言語は英語にて行った。

2. 旅行会社への依頼

(1) 見積もり条件の設定

初めての海外修学旅行のため、見積もりに関して未知の部分があることをあらかじめ旅行会社に伝えたくて、

下記の条件にて、本校にて実績のある5社に依頼した。

- ①台湾、台北へ9月末から10月初めの4泊5日
- ②本校から現地校への楽器の輸送
- ③楽器の輸出入管理及び手続
- ④通訳の手配
- ⑤病院他の現地案内

以上5点を条件として提示し、見積もり依頼を2013年4月に依頼し、約1か月後の5月を期限と定めた。

各社が詳細を問い合わせてきた段階にて、旅行金額に関しては単に安いのではなく、各種手配を含むコストパフォーマンスによる判断をすることも伝えた。

(2) 選定方法

まず、職員会議にて検討する前に、海外修学旅行チームにより検討を行うこととした。5社とも資料と共にプレゼンテーションしていただいた。それにより詳細な情報の収集力と各社の特徴をはっきりと認識することができた。職員会議ですべてのプレゼンテーションについての感じた特徴を説明した。今回、旅行会社選定にあたり、特に重要視した項目は以下の5点である。

- ①楽器輸送の実績がある。
- ②安全で確実な楽器輸送のために、できれば自社と強い関係の輸送部がある。
- ③楽器輸送のためのカルネ作成や保税の為の具体的なコストを算出できる。
- ④緊急対応が出来る現地法人を持っている。
- ⑤催行の際、添乗員が随行する。その質も大切な指標となる。

各社におけるプレゼンテーションと資料によると、台湾は既に各社ともに他校の修学旅行にて実績があり、それを基にしたプレゼンテーションも多く見られた。また、すべての旅行会社において、東京都の修学旅行の金額を基準としてもっとも安い金額を提示するべく努力された見積書が提出された。その中で、特に今回の修学旅行においては、演奏が不可欠であるため、楽器輸送に対する情報や実績が多い旅行会社にしぼられるようになった。

この検討時に音楽界では、世界的ヴァイオリニストの堀米ゆず子氏が、演奏会のためのドイツ入国に際し、3億円のヴァイオリンを税関にて差し止められる事件が主要各紙にて報道された。堀米氏ほど高額でなくても、ヨーロッパでは楽器の鑑定額の2割から4割を越える通関税を要求されることがある。このような事件があると旅行自体の計画が根底からくつがえされるため、何らかの手段を得て適正な保稅手続を行うことが必須要件となってきた。

楽器関連では、台湾における現地法人または日本からの随行員についても重要な項目となっている。以前、本校ではフランス・パリのユネスコ本部にて公演を行ったことがある。その際、生徒が楽器から離れる際、常に楽器を管理する人手が必要であった。特にホテルでは、楽器を集中して一部屋に集め、そこに張り付いて楽器番をする人手が必要ことがわかった。たとえば、どうしても昼食には生徒指導のため教員は楽器を管理するわけにはいかないので、旅行会社添乗員にある程度の楽器に関する知識のある人員が不可欠となった。今回はそれよりも小さな規模、参加人数ではあるが同様の条件となるため、この項目についても旅行会社の選定上、必要となる条件のひとつとした。そして、最終段階に残った旅行会社には、楽器の具体的な輸送プランと見積もりを提出していただいた。また、これは楽器輸送におけるあらゆる可能性とリスクの発見にも役立たせるために、できる限り具体的でより経済的な見積もりをお願いした。この楽器輸送を含めた見積もりと、他社の見積もりを合わせて

状況の説明と共に職員会議に提出し、審議の上、旅行会社を決定した。

3. 言語の問題

海外校と交渉する際、言語の問題は大きい。生徒たちが文化交流をするのと、ビジネスでお互いの利益を調整するよう交渉するのは違うレベルだということは想像がつく。更に、今回の修学旅行では、お互いの文化交流は当然のこと、更に数年おきの継続的関係をも視野においた高度な交渉が望まれていた。

これは運営委員会にて検討される段階において、コストが国立大学附属高校として許される範囲を越えた場合、渡航費の都合上アジア圏にて行くことを示唆されたことによる。運営委員会では今後の海外修学旅行のあらゆる可能性を検討する先行事例として今回の海外修学旅行を許可した点は強く確認されていた。そのためにもこの旅行は失敗できないというプレッシャーを強く受けていたのも事実である。それらを含め、直接交渉の言語はどちらにも交渉力が片寄ることのない英語が選択された。

さらに、実際に交渉を始めると、英語を用いる技術的なメリットもはっきりした。つまり、英語の場合、入力に関してあまり問題がなく、情報をやり取りするなかで同じ文字を共有できるということである。

一方、2バイト言語において、特にそこで使われる文字が複雑な場合は条件がかなり異なる。これは後述するが、プログラム作成の際、同じように見える台湾の漢字でもコンピューター上の管理の仕方やフォントの違いで表現状況が全く異なり、これを用いて日本側で情報の共有を行うのは困難である。

そのような意味でも、技術的困難が少ない方法の選択として、英語はまさにグローバル言語であることを痛感した。中正高級中学の担当教員との交渉のなかで、連絡、相談は英語であり、印刷配布されるプログラムは最終的に台湾語と日本語の両国語にて併記することで合意した。詳細は後述する。

4. 交流演奏会に向けた計画

(1) 生徒全員が演奏をできるように計画

本校では演奏家を目指す生徒が多く、ひとつの演奏会を下準備から事後の清算までを通して学ぶことがこの演奏修学旅行の目的である。さらにこの修学旅行では、同じような環境に学ぶ友人を、海外で得る機会を大事にするため、交流活動も取り入れた。交流事業については別項目で述べる。

演奏会作成の第一段階は、出場者選定である。まず、本校生徒の専攻と人数を伝え、中正高級中学の出場者を伺い、本校の生徒と共にひとつの演奏会を効果的にバランス良くメリハリやストーリーのあるものとして運営できるよう、演奏曲目を配置する作業を開始する。特に、本学年では全員が現地にて演奏するということにこだわった。以前の国内修学旅行でも、演奏曲目などの関係で自分の専攻ではなく、合唱に参加するか、舞台の裏方として携わるなどすべての生徒が役を持って活動していた。しかし、今回は台湾という外国を訪問するため、なるべく全員が演奏できる環境を用意することを命題の一つとした。舞台にて演奏するのと、しないのとは、充実感も共有感も全く異なる。特にピアノ専攻の生徒は出番が少なく、学年の4分の1以上の生徒がピアノ専攻であるにもかかわらず、なかなか配慮が至らなかったのが現実である。これは最も実現したい事項であった。

全員が演奏できるようにするためには、大きないくつかの問題を解決しなければならなかった。本校の意向を中正高級中学に伝え、中正高級中学側でも人選を行い、その専攻と人数をお知らせいただいた。そのすべての生徒の専攻を考え、第2専攻の可能性も情報を交換した。このような細かいやり取りを何度か続けることにより、同じ年齢の高校生全員が演奏に参加できる可能性が高まった。

(2) 演奏プログラムの計画

プログラムは両校のポリシーに従って、演奏者及び演奏曲目を選び、それをつきあわせることから始めた。基本的には数人からなる室内楽チーム数組が交互に演奏し、大きな編成にて終了するものを提案した。そして、検討を重ねた結果、室内楽チームに続き、本校弦楽器合奏を経て、日台全員合奏の作品にて終結するものが基調となった。

日台で検討する際、演奏会全体の時間も基本的な国際的な演奏会に倣った2時間枠とした。10分前後の延長は

考えられるものの、3時間を超えると発表会のように各演奏が並列されたように感じられ、演奏会としてのメリハリがなくなるため、演奏時間については特に厳しく検討した。本校と台湾それぞれの室内楽には1時間弱で検討し、その他に全員合奏を考えるという基本理念である。参加人数は増えるが、演奏時間を増やさないという厳しい条件となった。本校はそれに従い、具体的なプログラムを生徒に検討させた。特に教員側から提案したのは、プログラムの中に大きな編成の作品を含むことと、ピアノ専攻生12名を含む全員の演奏参加である。この学年には、ヴァイオリン、チェロの他にハーブが1名、そして管打楽器にはフルート1名、クラリネット2名、サクソ1名、打楽器1名が在籍している。オーケストラを組むには難しい管楽器の在籍バランスのため、大きな編成は弦楽合奏と設定した。その他の生徒は室内楽を効率的に組むよう生徒に提案した。最終的に管楽器は次のように生徒が検討した。弦楽器としてハーブが在籍しているため、フルートとのデュエットで演奏する。クラリネット2重奏、サクソと打楽器の合奏はそれぞれピアノの共演者と共に演奏する。

ピアノ専攻生12名については、クラリネット2名との共演者、サクソと打楽器の共演者、そしてピアノ2台4手の作品及びピアノ2台12手の作品で全員出演が可能となる曲目を検討した。共演者として12名全員を出演させるグループを作るのは演奏時間の問題で不可能なため、ピアノ演奏者同士の室内楽を加えたのである。ピアノ2台4手の作品はすでに膨大な作品数があり、既に演奏実績が多く残されている。しかし12手の作品は世界的にも希で、今回この組み合わせを提案できたのは、初見演奏試験における委嘱作品に素晴らしい作品があったことに因る。DVD記録を全員で検討し、「これを演奏しよう」という声があがった。柳川瑞穂作曲《Circle of circle》という作品であるが、これは単に6人が2台のピアノに座って弾くのではなく、それぞれの奏者が自分の位置を変え、さらに舞台上を歩いて別のピアノにまで移動する。その歩き方までを指定している作品で、内容もエンターテインメント性を持ち合わせた4分程度の作品である。今回の演奏はこの作品に助けられたところが大きい。

また、この学年には邦楽を専攻とする生徒が7名在籍するため、その演奏についての検討も必要であった。特に邦楽は流派による厳しい決まりが多く、楽器もそれぞれ専用のものを用意する必要がある。更に編曲を許さない流派もあるため、簡単には人数調整が出来ないのが現実である。そこで、当初より藝大邦楽科主任との打ち合わせを重ねた結果、流派を超えた邦楽合同演奏ではなく、それぞれの部門でなるべく短い演奏時間でありながら、本格的な作品を完全な演奏形態で演奏するのが良いという結論に至った。結果として生田流箏曲2名で一曲、尺八が1名で独奏、長唄三味線2名で一曲、最後に山田流箏曲2名で一曲の計4曲を発表することとなった。

洋楽の弦楽器合奏の選曲については、指揮者がなくても演奏できる曲目を選定することである。更に通常弦楽器合奏はコントラバスが必要となるが、それも在籍していないため、不在でも演奏できる作品を選曲する必要があった。このような厳しい条件で選曲することは生徒だけではリスクが大きいため、藝大弦楽器科に状況を説明し、選曲を含めた実施に対する相談を行った。

(3) 弦楽器科および台南藝術大学から

弦楽器科への相談から暫くして、当時の学部長澤和樹教授（現学長）より連絡があり、海外修学旅行が台湾であることを確認した上で、東京藝術大学においてマスタークラスをする予定であった台南藝術大学学長でヴァイオリン科の李肇修教授を紹介された。また、オープンしたばかりの奇美博物館を紹介されると同時に、澤和樹教授自ら弦楽合奏の指揮をしてくださる旨を伺った。更にコントラバスの奏者として本校の那須野直裕教諭が随行することが決まり、万全の体制が敷かれた。

弦楽合奏に関して、澤教授が指導、指揮して下さることが決まり、その選曲においては生徒の技量を最大限にまで生かし、世界で通用する実績ある邦人作品、芥川也寸志《トリプティック》を演奏することとなった。この作品は本校の生徒からも採択する声が上がっていたが、指揮者不在で演奏を行うことは難しいため、選曲から外されていたものである。東京における練習段階から、台湾における本番の演奏に至るまで、時間を見つけて指導していただけることになった。

台南芸術大学学長李教授には、本校でもヴァイオリン・マスタークラスをしていただいた。また、台南における演奏会の際には、打楽器からグランドハーブに至るまでご手配いただいた。

(4) 台湾中正高級中学との全体プログラムの作成

<本校の曲目>

1. 邦楽	生田流箏曲 尺八 長唄三味線 山田流箏曲	宮城道夫 中尾都山 藤舎呂華泉 中能島欣一	さらし風手事 朝風 流れ～滝流し 花三題
2. 洋楽	クラリネット二重奏曲 ハープとフルート二重奏曲 ピアノ8手合奏 サクソ、打楽器、ピアノ ピアノ12手合奏 弦楽合奏曲	イベール スメタナ ピアソラ 柳川瑞季 芥川也寸志	エントラクト ロンド リベルタンゴ Circle of Circle 弦楽のための三楽章

<台湾側からの提案曲目>

1. 国楽	揚琴	アルベニス	アストゥリアス
2. 洋楽	フルート、ヴァイオリンとチェロの三重奏 ピアノトリオ ピアノトリオ 合唱（無伴奏）	クンマー メンデルスゾーン スメタナ マース	小協奏曲 ピアノトリオ第1番 作品49 第1楽章 ピアノトリオ 作品15 第3楽章 Just the Way You Are

ここで注意したのは、あくまで合同演奏会であり、音楽を大切にすることが最優先され、その中でお互いの文化を理解しつつ、同じ年代、同じ音楽を志すもの同士がどれだけ高めあい、満足のいく時間を得るかということに最大限配慮することである。特に同じような楽器が並ぶと、技術的な比較になってしまう恐れがあるので、なるべく中正高級学校と本校とが交互に、しかも音楽的なつながりを持つよう工夫した。また、舞台設営上の理由からも、小さい編成から大きな編成へ展開させると共に、それぞれの国の伝統音楽を効果的に配置するよう心掛けた。

全員でひとつの舞台に登壇できるものは残念ながら既存作品にはなかった。特に全員演奏を難しくした原因は、管楽器の人数が不揃いであったことにある。本校、中正高級中学ともにそれぞれの専門を足しても、不均衡はいかんともしがたい状況であった。たとえばサクソがいるのにクラリネットは2本。ファゴットの不在や中国の伝統楽器の使用など弦楽器を除くすべての部分で、標準的な作品にみられる人数比ではなかった。そこで、全員が参加できるプログラムを用意するため、音楽科教諭である平川加恵教諭が両校の友好関係ができるような作品を作曲することとなった。曲については更に、以下の条件を設定した。

<友好作品についての条件>

- ①生徒全員がひとつの舞台に乗ること。
- ②極力専攻の楽器を演奏する。結果として、ピアノ及び邦楽の生徒を除き、台湾の楽器を含め全員が専門楽器で演奏できた（ヴィオラは、楽器準備の都合上、持ち変えをそのまま専門とした）。
- ③日本と台湾の誰もが知っている歌をテーマとする。
- ④作曲にあたり二つの国の友好が示せる作品を目指す。

この作品は台湾に敬意を払うと同時に、日本の友好的かつ意欲的な心情が伝わることを願って依頼した。これに伴い、歌の選定を注意して行う必要が出てきた。日本の歌については、既に多くの自作、編曲作品を手掛けているため、修学旅行チームの平川教諭に選曲を依頼した。

作曲時に問題になったのは台湾の歌で、プロジェクトに対しての同意を得てはいるものの、日本において具体的な作品を選定することは難しかった。最終的に平成27年3月に台湾を事前訪問した際、直接中正高級中学の洪心怡先生を含む数人の音楽教諭に依頼し、候補作品を10曲挙げていただいた。それを持ち帰り、3月から9月までの間に平川教諭に作曲してもらった。

日本の歌は《ふるさと》を採用し、台湾の歌は《月亮代表我的心》となった。最後にこの作品を演奏することにより、舞台上の両校の演奏者が一体感を得るだけでなく、関係した人々をはじめ、初めて聞くすべての聴衆をも魅了して、大きな感動を呼ぶことになった。

V. 直前の準備について

1. 下見について

下見では、中正高級中学、通訳をお願いする東呉大学、そして台湾の大使館に相当する日本台湾交流協会（以下、交流協会）を訪問した。交流協会からは、補助金の申請を行い、具体的な宣伝周知についても取り計らっていただいた。

下見では、旅行会社の添乗員に楽器輸送の問題点とホテルでの保管状況の確認、高速鉄道を含む輸送機関での諸問題の確認を行っていただいた。また、今回は台北から台南への日帰り演奏会を含むため、その時間的制約と台南駅から奇美博物館への移動の現状を確かめ、昼食等をどこで用意するか等の具体的問題を解決するための調査をしていただいた。

(1) 下見の行動

3月23日、本隊で使うのと同じ集合場所を用い、通関の時間も計りながら設定した午前便にて羽田空港を発った。楽器通関の時間を3時間弱と設定した。到着後、そのまま中正高級中学を訪問し、挨拶及び名刺交換を済ませ、演奏プログラムや、弁当代、飲み物代、交歓会の費用などの経費の負担について確認した。リハーサルや合同練習の時間と場所、人の流れと時間表、交歓会における挨拶の順番と出席者、ホールの現状、借用する楽器の状態を確認した。特にハープやドラムセットを中心とする不足楽器の調達に関して相し、合同作品作曲のための台湾の楽曲選曲依頼を行った。その後、すぐに東呉大学へ移動し、蘇克保教授と通訳の具体的な依頼事項の確認を始めた。同大学内の研究室にて日本語から台湾語への通訳をしていただく大学院生の呂函螢さんとも直接話し、40人全体への通訳を行うための人数決定を相談した。短い時間ながら大学の茶室も見学できた。その後、交流協会へ移動し、演奏修学旅行の案内と後援の依頼を行った。台湾入国のための招聘状作成や楽器輸入に対する便宜を依頼した。また、中正高級中学と共に演奏会の広告をしていただくことも叶った。

翌日は台南へ移動した。奇美博物館は台南駅から車で約30分かかる位置にある。旧市街を抜け、目の前がかなり開けた場所にあった。

奇美博物館では、現地の台南芸術大学の李学長にご案内いただいた。美術館自体を見学することもさることな

がら、今回の訪問の最も大切な楽器収蔵部を李学長の計らいで見学することができた。また広報官だけでなく、楽器部の学芸員もご紹介いただき、楽器修復部での見学を具体的にご説明頂いた。楽器庫にも招き入れられ、歴史的に重要な楽器をいくつも紹介された。

演奏会場の確認も行った。奇美博物館では演奏ホールも完成間近で、演奏会場には玄関ホールと演奏会ホールの二つを提案された。特に玄関ホールはイタリア建築のドームを模したもので、周囲および床ともに重量のある大理石にて建築されているため、音響も非常に優れたものであった。特に邦楽などの楽器だけでなく、周囲の音響を必要とする分野ではとても有利だと感じた。更に、当日の観客の動きを考えたとき、玄関ホールを使うのはとても有効であると相談が進んだ。

台南での交渉が済み、台北に新幹線で戻った。その夜は台湾でもっとも大きな演奏会場での中正高級中学の定期演奏会を聴いた。演奏会は本格的なものであり、技術的にも十分手応えがあり、合同演奏にも期待がかかった。

翌日は朝早くに中正高級中学を訪問し、帰国便までの限られた時間の中で打ち合わせを行った。とても意欲的で友好的な先生方が交渉に当たってくれているとわかったので、安心すると同時に気が引き締まる思いがした。

(2) 下見において新たに確認された問題

下見において多くの問題が解決された。また担当者と直接面談したことにより、より丁寧な計画を立てるとともに友好関係を築ききっかけを実感した。また、それと同時にいくつかの問題が新たに発見された。その大きな部分が、楽器の調達である。特に問題になるのがハープと打楽器である。ハープについては中正高級中学にはなく、台北市内で調達する必要がある。また、ドラムセットも同様で、借用する必要がある。

ハープについては、本校卒業生の知人より、台北のオーケストラでハープを弾いている方から借用をお願いした。ハープは楽器のみの借用だけでなく、楽器の専用輸送についても併せてお願いすることになる。ドラムセットについては、規模や品質によって全く異なるため、借用の発注が難しいことがわかった。打楽器が必要なものはピアソラのリベルタンゴであるため、フラメンコ等でよく使われるカホンを経由してドラムセットの部分で採用することを検討した。特に打楽器については、本校の打楽器担当教員に相談し、通常のカリキュラムに追加して、カホンについても教えていただく了承を得たうえで、ドラムセットをカホンに交換して演奏することとした。

2. 中正高級中学における演奏以外の打ち合わせ

下見を終えてからは、急ピッチで演奏会および交歓会について用意が進んだ。特に中正高級中学における打合せは非常に精力的な先生方のお力を得て、プログラム作成、および舞台設定とその変更の流れなどについて具体的に資料の交換が始まった。当初は室内楽プログラムについては、それぞれの学校ごとにまとめて演奏するという案も出ていたが、舞台の編成が徐々に大きくなるような順番にすることで、より効率的で魅力的なプログラムになることがわかった。

交歓会についても話が具体的に進むにつれ、お互いの誠意が通じたこともあり、十分な検討が出来た。契約確認書の作成は、後々の問題を解決してくれる大切な部分だと確認した。

3. 楽器輸出入の用意について

(1) 楽器リストの作成

まず、日本から持っていく楽器の調査である。保税手続きをするために必要な情報は、楽器の種類、楽器の名前、製造会社名、楽器の製造番号、大きさ、重さ、価格、付属品等の有無などであり、これらを生徒に申告させた。それらを収集し、カルネを作成した。このカルネが帰国までの重要な書類となる。また、空港での時間を不確定にするのもこのカルネの出来にかかっていた。

(2) 楽器輸送のための梱包

楽器を輸送するうえで、航空機を使うための特殊梱包も発注した。今回は特に箏が4面あるため、その立奏台も含めて、紹介いただいた和楽器取扱店にお願いすることとした。2面を1組として、それに立奏台を含めて段

ボールで梱包する。三味線については、保護者から手持ちケースを借り、皮が破れたり壊れたりしたときの補助用楽器を含め、3挺持っていくこととなった。生徒はそれぞれ自分の荷物と三味線1挺を持ち、教員が補助用楽器を飛行機機内にもっていくこととした。

(3) 楽器輸送における諸費用

動産保険は価格の約1パーセントを必要とするため、学校の楽器をなるべく使用することとし、もし高額な楽器を個人で持っていく場合は、持ち主負担とした。高額楽器の円滑な輸出入のために中正高級中学および奇美博物館より招聘状を事前に送ってもらった。

輸送には楽器の安全を確保するため、チェロ、ヴィオラについては、以前パリ公演の際に使ったフライトケースを使用した。フライトケースはその大きさから旅客機には積載できず、貨物専用便にて台湾へ直接送ることとなる。つまりチェロ、ヴィオラについては同じ飛行機にて輸送することが出来ないため、事前演奏会終了後すぐに梱包して輸送を開始し、台湾にてすぐに通関できる状況にしておかないと、台湾における最初の演奏に間に合わないことが判った。曜日回りもあるが、日曜日は通関業務が休止されることも判明し、日程に反映して計画しなければならず、楽器輸送の困難さを痛感した。

カホンや邦楽器については教員が分散して機内に持ち込んで輸送することとしたが、現実的には少ない教員で引率しているので、荷物を管理するのにとても手間取ることになる。

4. 危機管理について

旅行の少し前になり Deng 熱の流行を新聞各紙が報道した。海外旅行では多くの事件事故が報道される中、個人では旅行の催行を中止または変更する必要があるかどうかの判断がとても難しく、外務省「海外安全ホームページ」による危険情報をその判断材料とした。致死性のものではないが、注意条項となっているため、健康には対策をたてて行くことを前提とした。また、現地の知人からの直接の報告や旅行会社の現地法人の情報、さらに台南芸術大学からの報告等も参考にした。具体的な対策としては、外務省の危険情報にあるように、塗布式の忌避剤を持っていくことにより対策することとした。

さらに、養護教諭からの依頼を受け、市内の病院一覧および所在地図、専門科の一覧などを入手した。また旅行会社からは、扱っている旅行保険との契約病院の一覧を入手し、台北にて疾病または受傷した場合、日本語にて受診できる病院および医院をあらかじめリスト化した。

5. チラシ、ポスターおよびプログラムの作成

様々な用意を続ける中、印刷物の作成を始めた。言語や習慣の問題、そして全演奏会の詳細の決定など諸問題が一気に押し寄せた実感を得た最初の作業であった。特にこの作業では、海外修学旅行チームではなかったが、西洋音楽史担当教諭には多大な協力をいただいた。

台湾語と日本語の2ヶ国語にて作成するという条件で作成し始めたため、各校の校長挨拶、プログラムノートなどすべて翻訳しなければならなくなった。更に音楽会のプログラムは、作品名や引用が多用され、その表記の統一や使用方法などを考えたとき、日本語や台湾語の知識だけではなく、音楽独特の表記方法についての専門的な知識が必要になることが明らかになった。

<具体的な改善点>

- ①翻訳はあくまで意識とし、最終的にはそれぞれの国々の言葉で自然な表記を心掛けるよう依頼し、留意する。
- ②作品の表記方法、作曲者や作品名などの順番をなるべく揃えるよう提案する。
- ③カッコ類や記号類の統一をなるべく行い、それを提案する方法を採る。
- ④活字が混在すると表記自体も安定しないため、各国語に対して責任範囲を提案する。

これらは編集及び校正に力を得ることとなり、特に2ヶ国語のプログラムの作成の規範となるものを得たように感じた。校正は印刷締切まで繰返し行い、プログラムを作成した。その結果、両校関係者より大変好評をいただいた。

6. 現地における楽器および関連部材の保管について

下見により、はっきりしたことは、楽器の一時保管のための場所を確保する必要があるということである。国内修学旅行では、教員の宿泊場所に楽器を置いたり、別の部屋を宿泊以外の条件で借り、食事や市内見学などの活動中の一時保管場所として使用していた。また、フランス・パリのユネスコ公演ではホテルの倉庫を借りうけ、その場に教員の一人が交代で監視を行った。今回はホテルからの提案でスイートルームの使用を選択した。

7. 離脱事故について

海外旅行の場合、旅行保険約款を了承したうえで、さまざまな条項を補てんすることを前提にした場合、行動がどうしても制限され、旅行内の禁止事項がどうしても増えることが判っている。特に団体旅行保険の場合、個人的な理由で団体を離れることは離脱事故となり、そこで起きた小さな事故でも保険引き受け会社に報告義務があり、団体旅行保険引受けの解除事項として保険契約状況を大きく変えてしまうことがある。今回の旅行では、安全に旅行が行える様々な契約（楽器の保険契約、怪我をした時の契約、物を紛失した時の契約、人の物を壊した時の契約、旅行が途中で続けることが出来なくなった時の追加料金の補てん契約）をした。

安全管理は単に個人の安全を考えるのではなく、団体全体や楽器の保険に至るまで影響があるためである。

8. 現地通貨の用意

生徒分については班別自由行動の際に必要なことを考え、現地通貨は1人1万円相当を全員に事前購入した。余った場合は再換金して戻しても損金は少ないことや、換金に使う時間がとれないことによるものである。食事や、日用品は旅行中すべて用意するようにし、各寝室にはミネラルウォーターも配置した。

VI. 台湾演奏修学旅行催行実施

1. 羽田空港の通関作業と荷物預入

出来る限りの用意を整えて、出発当日を迎えた。係官に従い、手持ちの楽器を持っていく生徒を全員集め、カルネの記載順番に整列してもらう。特にスペアの楽器については自分ともう一人の音楽教員が手荷物として通関させた。税関職員はカルネを確かめ、いくつかの楽器を開梱し検品した。その後それぞれシールを受け、通関作業を完了させた。

2. 台風の影響

天候はまさに人の力の及ばないところであった。9月は台風の多い季節ではあるが、影響があるのは1日程度である。学事暦の作成は約1年近く前であり、航空機の予約は2年以上前に日時を決定しなければならない。そのために、天候不順による、日時の変更は難しい。

今回の修学旅行では、朝の時点では東京は晴れており、台湾では台風が接近中ではあるが、台湾松山空港は閉鎖されている状況ではなかった。しかし、当日発のすべての台湾便は「May return」の条件付きで、天候状況によっては羽田へ引き返す条件付きであった。この時点で前後の航空便はすべて時間通り運行され何の問題もないかのように思われた。

約4時間のフライトの末、台湾松山空港に近づいた。航空機自体はそれまで大きな揺れはなかったが、台風の影響ですべての航空便が着陸できずに松山空港の上空で待機旋回を続けることになった。待機時間は約1時間弱であったが、台風影響下の待機で航空機は細かく不規則な揺れを繰り返し、その待機中に気持ちが悪くなるくらい、過酷なものであった。結局、2回の着陸を試みた結果、羽田へ戻ることとなった。

3. 台風対応、翌日便への振替え

航空会社の対応で、変更便については少し早い臨時便にて対応された。その日は19時に羽田に帰着したので、そのまま一時解散となり、翌日再集合となった。時間が早いこともあり、羽田から近いところに住居があるものは帰宅した。また遠方の生徒は航空会社の規約により、ホテルに部屋を用意してもらい、旅行会社引率3名と担任沼田および生徒4名が宿泊することとなった。

4. 通関した楽器への対応

通関はカルネに基づく通関作業が必要なため、他の荷物と異なり、一度空港内に持ち込まれたものを国内に持ち込み、各自が持ち帰ることが不可能な状況となった。本来なら、手持ちの楽器は自分の身から離さないものであるが、通関の作業上どうしても空港内に保管せざるを得ないことが判り、急遽航空会社の地上職員と税関職員、添乗員と共に検討を始めた。結果、航空会社が保有する保税倉庫に楽器ということの特記し、特別に手押し車に平置きして保管してもらうことが最善との結果を得て、生徒を説得して翌日便まで保管した。

5. 旅行催行の続行と中断

台風の影響は、荷物の通関にとどまらず、多くの問題を引き起こした。なかでも、台風時の荒天による疲労が生徒の体調に影響した。また、台風によって会場校である中正高級中学に被害があり、これらの2つは旅行催行の判断を困難にさせる大きな要因であった。

台風の影響で最も体調に変化がみられた生徒からは、保護者から「投薬を処方してもらうことで参加したい」という意向を受けた。一方、一時帰宅が出来なかった生徒は、ホテルの快適な滞在で回復することが出来た。体調という面では、疲れてはいるものの事故があったわけではなく、体調不良のために旅行中止を希望する連絡は生徒、保護者共になかった。

一方、中正高級中学では、古い校舎のために雨漏りが起こり、演奏会を行うためにはまず舞台の清掃が必要との連絡を受けた。これについては到着次第、一緒に清掃を手伝ってくれば大丈夫であるとのことであり、教員をはじめ添乗員にもお手伝い頂いた。

それでも、台風による一日遅れの旅行を続行するか、中止するかを、管理職と共に検討を重ね、最終的な判断は、翌日の集合後に現場に任された。翌日の天候が安定していたこと、生徒の集合が時間通りに行われたこと、特に体調が悪くて旅行に行くのが困難な生徒が出なかったこと、さらに中正高級中学から被害状況報告が来て、回復可能なことが判ったことを受け、副校長と共に続行を決定した。

6. 台風対応による行動変更

到着後、入国手続き、通関手続きが済んだ時点で、生徒は少し早い時間ではあるが、空港よりバスにてホテルへ直行させて休ませよう旅行会社添乗員に頼んだ。一方、翌日に控えた本番の為、副校長と担任および1名の添乗員は復旧作業と翌日の最終決断をするための現状確認のため、すぐに中正高級学校に向かった。

フランス・パリのユネスコ公演では、日程の都合上、観光ができなかったことを踏まえ、生徒の様子を鑑みて旅行会社の方々が気を利かせて、バスを降りての簡単な市内観光を行っていただけた。台風の影響による日程短縮のため、自由班行動を含めた市内見学が出来なくなるところ、中正記念堂などを巡り写真を撮ることもできた。

一方、中正高級中学への確認は、現地の教員による水漏れなどの処置をはじめ、基本的に演奏会が出来る状態であることを確認することが出来た。ただし、翌日早めに会場整理をする必要があること。練習をはじめ、交流会等の時間が非常に短く、手際よくこなさないと難しいということ。演奏会当日のハーブの運び込みは、問題なく処理されていることなどが判った。

7. 士林市場見学

台風による日程変更をなるべく最小限にするため、生徒の様子を見ながら、士林市場見学を行うことを決めた。当日の羽田からのフライトは非常に快適で、何の問題もなかったことが幸いし、生徒の様子に問題は見られなかった。教員は2人ずつ組み、当日と翌日とに分かれて、生徒の楽器管理をした。



8. 中正高級中学での活動

当初の予定では、中正高級中学にて初日に顔合わせと日台合同合奏練習、およびそれぞれのグループにて舞台練習を計画していた。舞台は順番に使用するため、待ち時間を工夫して演奏グループを中心に市内見学を行う予定であった。しかし、台風で2日目の練習等の活動が全く出来なくなったことから、予定3日目は中正高級中学での舞台稽古と本番、そして交流会までを1日で行わなければならない忙しい状況となった。

それらの状況を生徒も自覚し、練習の進行や会場の設営を積極的に行うことにより、通常より緊張してスムーズに行うことが出来た。また、演奏会の進行では本校だけでなく、言葉が正確に伝わらないまでも身振り手振りも交えて日台の合同作業が行われ、最終的にはとても充実した感動が得られた。日台合同の大合奏曲では各パートのフルト配置（オーケストラ内での席順）の工夫であり、日本と台湾の生徒が隣り合わせになるようにし、またオーケストラのコンサートマスターは中正高級中学にお願いするなどの細かい配慮を重ねたこともあり、舞台上での指揮者との握手を含め、演奏中から終演まで一体感が得られるよう工夫した効果が得られた。また双方の歌を題材にしたこともあり、会場からはブラボーが飛んだ。

また、偶然にも台南芸術大学の李肇修学部長が中正高級中学の出身であったため、演奏会当日にかけつけていただき、交流会でもお言葉を頂戴する機会を得た。澤和樹学部長、中正高級中学簡菲莉校長、鈴木芳明副校長とは記念品を交換し、親密な交流会を行うことが出来た。生徒も各テーブルに日本、台湾双方と一緒に座り、連絡先の交換を行い、親交を深めることが出来た。お互い将来、海外における活躍の場で再会出来ることを願い、交流会を締めた。

9. 台南・奇美博物館まで

4日目は台南・奇美博物館における演奏会と見学であった。奇美博物館は、特に世界の銘器を収蔵している博



博物館で、アマティ、ストラディバリウス、ガルネリウス等の超銘器を始めとして約1300丁の歴史的に重要なヴァイオリンを収蔵している。またヴァイオリンだけでなく、ヴィオラやチェロの銘器も収蔵し、特に弦楽カルテットでのセットなどの珍しいものも数多く収蔵している。常設展示では、管楽器、鍵盤楽器、ハープを含むオーケストラの楽器や、世界各地の民族楽器から、オルゴールを含む自動楽器まで展示している。更に、美術作品も多く収蔵し、フレスコ画から近代に至るまで、それぞれの専門学芸員が管理し展示をおこなっている。彫刻も多く収蔵し、触れて感じる事が出来る展示であった。

奇美博物館へは特別に博物館正面入口まで、楽器の湿度温度管理などの徹底のためにバスを横付けしていただいた。これは健康被害が考えられた Deng 熱の予防にも効果を上げた。博物館館内は完全空調のため、外気に触れたのは20メートル歩いただけであった。すぐに演奏会の用意を行い、時間通り演奏会は行われた。エントランスで行われたこともあり、多くの観客から声援と拍手を送られた。特に響きの良さも相まって、台湾の歌と日本の歌を取り入れた平川教諭の作品は喝采を浴びた。

10. 博物館と楽器室の見学

演奏後すぐに楽器室にて見学を開始した。ストラディバリウスを始めとするヴァイオリンやアマティのチェロなどが次々と紹介された。特にヴァイオリンについては澤学部長がすべての楽器をそれぞれに最も合うフレーズを演奏し、楽器の特徴がはっきり聞こえるよう紹介した。奇美博物館の楽器の学芸員がそれぞれの歴史を説明し、それを博物館の秘書が日本語に翻訳して生徒に伝えた。その後、ヴァイオリンとチェロ専攻の生徒はそれぞれ大変価値のある楽器を試奏させてもらった。解説が終わった後、ピアノ、管楽器及び邦楽専攻の生徒は常設展示を見学した。



11. 楽器の梱包と帰国準備

飛行機にて別送する楽器は、台北に戻った時点で荷造りを始めた。チェロ、ヴィオラをフライトケースに格納し、箏4面を専用梱包に戻した。更にハープの弦やスタンド類、楽譜類を含む小物をフライトケースに同梱する。それらを10月1日中に空港まで輸送するトラックに載せ、発送した。生徒には忘れ物が無いよう注意し、翌日の出立準備を促した。特に携帯電話などの通信機器、貴重品、楽器の付属品などの再購入が難しい物の管理を徹底するように促した。

12. 帰国と解散

最終日は午前中に時間を調整するための市内観光で龍山寺と土産店に寄り、松山空港に向かった。帰国のための台湾出国での通関手続きを、往路同様、全員が楽器を持って並び、カルネを提出して行った。出国手続きも無事行われ、空港で搭乗待ちをしていたときに、再度天候不順で当該航空機が「May return」となっていることを知った。生徒がパニックになる恐れもあるので伝えないようにと添乗員から指示されたこともあり、天候は往路ほどの荒天ではないということから話題にはせず、荒天は杞憂に終わり、問題なく帰国した。海外旅行では何が障害となり、解決の糸口となるかが全く予想できないのを実感した旅行となった。

生徒1名がコンクール出場のために遅れて参加したため、別の航空会社の便にて澤学部長と共に帰国した。主グループより1時間程遅れて帰着するはずであったが、こちらはエンジントラブルで更に1時間程度遅れて羽田へ到着した。全員の無事を確認し、この修学旅行を解散した。

VII. 反省と改善点

今回の演奏修学旅行は、全く経験のない学年全員で催行した本校初の海外旅行であることと、台風による航空便の引き返しが重なり、非常に不利な条件で催行されたので、多くの反省や改善点が挙げられた。当初の運営委員会からの意思であった、次回に繋げることの出来るコネクションを残すことも目的とする、という点では評価の出来る運営だったと思われる。

演奏の質はよく、奇美博物館では当日の邦楽演奏が後日、常設展示で採用されたことをはじめ、各洋楽も奇美博物館公式の Facebook にて全世界に発信されることとなり、右のような感謝状も届いた。また、帰国した翌週に東京藝術大学を訪れたフランス大使夫人を歓待する演奏会にて再演した。

同様に中正高級中学からも、次の機会を楽しみにしているとのメールを受け取ることが出来た。公演を行ったすべての会場から次の機会を約束されるだけでも大きな収穫であり、今回の演奏修学旅行は大成功であったといえる。

反省する点は多く、特に教員のコンセンサスを得ることがとても難しいと感じた。海外法人と交渉を重ね、更に現地で生徒を指導しながら臨機応変に旅行を進め、しかもその中で様々な環境変化に対する判断をしていくのはとても厳しかった。また、交渉を重ねていくためには、多くの経験と労力が必要であり、それを分散化することが出来なかったのも、次回への反省点である。

しかし、このような状況下でも事故が全くなく、すべて順調に行われたのは旅行会社の采配で多くのベテラン添乗員を配置していただき、個々の事案について最適なソリューションを得た結果だと考えている。旅行を催行することの難しさと労力を改めて感じている。自分でも努力をしたが、それ以上に素晴らしい人たちの恵まれた出会いに感謝が絶えない。

VIII. 生徒の感想

今回の用意は十二分にしたつもりでも、やはり不足があったのは否めない。またそれぞれの作業量が多く、時間との闘いであったのも事実である。更に言語の壁や文化の違いからくる交渉の難しさは最後まで残った。しかし、できる限り丁寧な仕事を続け、学校間、教員間の関係は良好に保たれたと思われる。

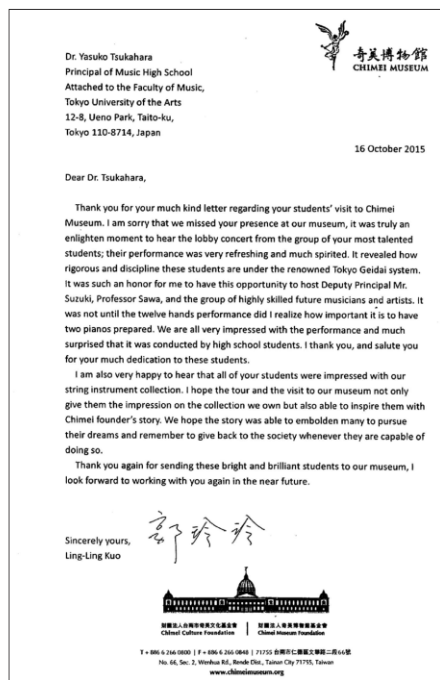
ここで、生徒の感想文を以下に記す。演奏家としての第一歩を体験してもらっただけでも、演奏修学旅行としての意義があったと考える。

<邦楽（箏曲）専攻>

私は今回の演奏修学旅行が記憶のある中で初めての海外旅行となりました。将来の海外演奏のシュミレーションと共に、今まで小さなころからずっと習ってきた自分の英語の実力を試す、とても貴重な機会をいただき、計画して下さった先生方に感謝の気持ちでいっぱいです。

中正高級中学との演奏会は台風の影響で台湾へ入国するのが遅れたことから、リハーサルができない状態での開催となりました。初めての場所と環境で、言語の違う人との演奏を、リハーサルなしで行うという大変な状況の中でも、みんなで協力し、無事に成功させられて本当に良い経験になりました。また、中正高級中学の生徒の方々とたどたどしくでも英語を使って話し、英語で通じ合える仲間ができたことは、すごく嬉しかったです。今でも、英語を使って連絡をとっています。次に会うときは流暢な英語を話せたら良いなと思っています。

奇美博物館での演奏では、空間に区切りがなく天井が高いつくりのロビーでの演奏となりました。そのような、慣れない場所でどのようにしたら箏の音色がお客さんまで届くか、とても良い勉強になりました。また、セッティ



ングの段階からお客さんの目にふれる状態も初めてでした。自分の行動に責任を持たなければならないことを学びました。

海外演奏を通して、改めて考えさせられることが沢山ありました。その場の状況に対応できる柔軟な頭と行動力、会話に必要な不可欠な英語など、これからの自分に必要なものを見つけることができました。この経験をこれからの演奏に活かせるよう、学んだことを身につけていきたいと思います。

<ピアノ専攻>

一回目の中正高級中学での演奏では、あまり響かないホールだったので、全体的にペダルをいつもより多めに踏むなどの工夫をすれば良かったなと思いました。そして二回目の博物館での演奏では、一回目とは逆に響きすぎて自分たちの出している音があまり聴こえず、きちんと合っているのか分からないまま終わってしまいました。

この二回の演奏を通して学んだことは、どんなホールでもどんなピアノでも臨機応変にそのときのベストを尽くすということです。前に書いたとおり、二回とも状況が全然違う中で反省点はありますが、無事成功できたのは大きな収穫になりました。

そしてもう一つ得たことは、二回目の時にその日一回も弾かずに本番に臨んだことです。私は今までそのような経験をしたことがなく、本番のときは指がきちんと動くか不安で仕方ありませんでした。普段とは感覚が違ったのは確かでしたが、上手くまとめることが出来たのも大きな収穫になりました。

また、一回目の中正高級中学では、台湾の皆さんと大合奏をしました。芸高だけでやったときも平川先生の素晴らしい音楽に感動していましたが、台湾の皆さんとやったときには、今までで一番達成感を味わえて、台湾と日本の音楽が一つになったことに大きな喜びを感じていました。台湾の方とコミュニケーションをとるときに英語がどれだけ大切か痛感したので、もっと英語が話せるように勉強したいと思いました。

最後に今回私は修学旅行委員としても活動した中で、初めは曲が全然決まらず大変でしたが、先生やクラスメートの協力もあってここまでできて本当に良かったと思いました。そしてスケジュールが大きく変わった中で演奏をこなせたこともとても良かったです。今回の経験で学んだことをこれからは活かしていきたいです。

<ピアノ専攻>

今回の台湾での演奏修学旅行で一番感じたことは、英会話の大切さです。私たちは、お互いに中国語と日本語という違う言語を使っていますが、英語は台湾の方々も私たちも勉強しているので、英語で会話をしたかったのに、言いたいこと、聞きたいことをうまく言葉にできず、コミュニケーションをとるのが難しかったです。英語で会話をしている友達を見て、私も早く英語をしゃべれるようになりたいと強く思いました。そのような中でもわかる単語を言ってどうにか伝えようとしたり、身振り手振りで必死に伝えようとしたりという光景が見られたし、自分もそういう風にして台湾の子とコミュニケーションをとっていたので、うまく会話ができなくても、伝えたいという強い気持ちが大事だなと思いました。

また、よかったなと思ったのは、二回の演奏会の両方とも、心から楽しんで演奏できたことです。特に、6人での「Circle of circle」という曲は、最初の練習では、自分の動きを確認したり自分のパートを追うことだけで精一杯で、まったく一つの音楽になっていませんでした。ですが、練習を重ねるごとに6人のひとりひとりが意見を言うようになり、少しだけまとまってきたなと感じました。でも、その時点で事前演奏会の日がちがせまってきたいて、とても人前で演奏できるレベルに達していないと気がつき、不安と心配ですごく焦りました。そこから、朝練などの練習を頑張り、先生や作曲してくださった柳川さんのレッスンを受けなんとか本番をむかえることが出来ました。

本番当日、これまでの環境と違ったり、直前に練習が十分にできなかつたりと色々ありましたが、そんなことは気にせず、6人全員が楽しんで演奏でき、お客さんにも見て、聴いて楽しんでいただけたのではないかと思います。たった一人でも欠けてはならないし、この6人で演奏でき、素敵な舞台に立てたことが本当によかったです。これからも、一つ一つの舞台で楽しんで演奏できたらなと思います。

<邦楽（三味線）専攻>

私は、この台湾での演奏修学旅行を通して「演奏家としての自覚」をもっと身につけなければならないと思いました。楽器の管理や、自分の体調管理、合奏する時は相手のことを考えなければならないし、演奏家は演奏だけでなく人間性や協調性もとても重要だと思います。

また、楽器を海外に持ち込むことが、どれほど大変なことを実感しました。税関や手荷物検査でも、ピアノ科やその他楽器を持っていない生徒たちを長時間待たせて手続きを行わなければならない、生まれて初めて、将来の仕事の模擬体験をしたようでした。

今回は、台風のために松山空港に到着することができず、一度羽田空港に引き返すというハプニングがありました。これには、誰もパニックにならず、落ち着いて冷静に行動していたので、さすがだな、と思いました。

中正高級中学では、ホールの音響が想像していたものとは全然違い、あまり音が響かなかったのですが、その環境で自分たちができる最善を尽くせたのではないかと思います。また同じ年の音楽を学ぶ高校生たちと一緒に演奏したり、話をしたりするうちに、仲良くなることができ、その後もやり取りをしています。好きな演奏家の話、普段の練習の話、学んでいる言語の話など、様々な話をするのができ、また合唱に際は台湾語と日本語の発音を教え合えて楽しかったです。

奇美博物館での演奏会は、素晴らしいものとなりました。中央に高く伸びる天井の下、様々な楽器がきれいな音で響いていて、最高でした。自分の楽器を演奏している時は、心の底から楽しかったです。音や、その余韻を純粋に楽しむことができ、ここで演奏できて本当によかったと思いました。そして最後の合唱は、たくさんの台湾の聴衆の方に、私たち自身が楽しみながら歌えた最高の演奏をお聴かせすることができ、「ブラボー！」と言っていただけで本当に感動しました。

IX. 謝辞

今回の演奏修学旅行では、非常に多くの方々にお世話になりました。2回分の演奏会があり、それぞれに全く違うの方々にお世話になり、旅行催行に関する一切は旅行会社のお力によるものです。通常なら必要のない招聘状に関することや、税関処置までお願いしました。

まず、中正高級中学との間を取り持っていただきました、本校卒業生の保護者である東京工業大学盛川仁教授に感謝申し上げます。楽器の調達などご尽力いただいた陳慧慈氏、唐中一氏に感謝いたします。

次に中正高級中学の洪心怡先生に感謝します。中正でのすべての窓口となっただき、演奏会の楽器の世話からチラシ、ポスターの作成、困難なプログラムの作成を最後まで責任を持ってなさってくださいました。今回の修学旅行の成功の鍵となる重要な方でした。その莫大な仕事量は想像を絶するものだと思います。本当にありがとうございました。また、中正高級中学の簡菲莉校長先生には招聘状までお願いしました。

同じく台湾台南芸術大学の李肇修学長に感謝いたします。奇美博物館では響きもよく素晴らしい演奏会となったのも李学長のご尽力によるところです。音楽家にとっての大切な機会をご用意いただきました。感謝しております。

公益財団法人日本台南奇美博物館館長の郭玲玲氏に感謝します。また宋芝瑜氏は流暢な日本語で楽器室にて数々の銘器のいわれをご紹介下さり、演奏会では各曲の説明を加えながらアナウンスいただきました。

台湾交流協会では、福増伸一氏、塩澤雅代氏、西野幸竜氏が現地日本人会へのチラシ配布や演奏会告知など積極的な活動をして下さり、更に楽器の輸出入に対してのアドバイスまでいただき感謝しております。

臺北市立中正高級中學實踐團
週年系列音樂會 I

樂趣藝揚

交流音樂會

交流コンサート

2015/9/30
14:00
Wed (2015/9)

地點／会場
臺北市立中正高級中學藝德樓7樓演奏廳
臺北市立中正高級學校藝德樓三階コンサートホール
臺北市北投區文林北路77號

演出單位／演奏
臺北市立中正高級中學音樂班
東京藝術大學音樂学部附属音楽高等学校

樂趣藝揚

交流音樂會
交流コンサート

2015/9/30
14:00
Wed (2015/9)

演出人／校務
簡菲莉、塚原康子

演奏監督／吹奏
謝範華、李俊傑、澤和樹

執行演奏／担当
洪心怡、趙白克行

指揮單位／指導
臺北市政府教育局

主辦單位／主催
臺北市立中正高級中學、東京藝術大學音樂学部附属音楽高等学校

協辦單位／共催
臺北市立中正高級中學學生家長會、
後援 日本交流協会（公益財団法人交流協会）、響和会、響視会

連絡電話／お問い合わせ +886-2-2823-4811 ext. 250

中正高中校長的話

孔子說：「學而時習之，不亦悅乎？有朋自遠方來，不亦樂乎？」今天我們在此共聚一堂，並與日本東京藝術大學音樂學部附属音楽高等学校的交流演出就是最好的例證。音樂班的同學平常總是持續不斷地精進學習，而今天有機會能夠與遠道而來的日本同學可相切磋，彼此交流，這不是很令人欣喜愉快的一件事嗎？

這次演出除了詮釋大師級浪漫樂派孟德爾頌以及民族樂派史麥塔納的經典樂曲之外，最特別的部分就是雙方各自展現了傳統樂器的表演，包括我們的揚琴以及日本同學的尺八、日本琴和三味線，並且有台灣和日本民族的大合奏，雙方互相的理解以及揉合，展現了音樂獨特的豐富性與穿透力，在空間中流動，在殿堂上悠揚，讓聆聽者與之感同身受產生共鳴，使我們感受這樣交流的機會，是教育中共學、共好與共享的價值所在。

感謝今天能隨現場所有嘉賓，聆聽音樂不只是個人心靈上的美好活動，由於您的出席，更是鼓勵舞台上新動態，努力不懈的莘莘學子，您的參與及肯定，是演出者繼續追求優質卓越的最佳動力，讓我們為這群未來的人才報以最熱烈的掌聲吧！

中正高高校長式辭

子曰「學而時之之習，亦說也」今日私たちがここで一堂に会するのはまさにこの言葉の通り。音楽班の生徒達は皆たゆまぬ努力を重ねて、今日は更に日本から来てくださった生徒達と交流、切磋琢磨できるようになりました。これとても喜ばしいことではないでしょうか。

この度の公演ではドイツロマン派の代表的作曲家メンデルスゾーンと国民楽派のスメタナの楽曲以外にも、特別な感傷として日本と台湾それぞれの伝統音楽の演奏も含まれています。例えば我々の揚琴と日本の生徒達の尺八、琴、三味線の演奏です。更に日本と台湾の民俗音楽の大合奏もあります。演奏者同士が理解し合い、通じ合うことで、音楽が持つ独特の豊かさや浸透力が会場に広がり、音に抑揚を生み、聴衆に喜びに似た共感を呼ぶことでしょう。このような交流の機会は、共に学び、共に成長し、共に分かち合う価値ある場だということを私たちに感じさせます。

ここで改めてこの場にお話しただいたすべての皆様に感謝致します。音楽鑑賞はただ個人の心を豊かにするためだけではなく、多くの方のご出席により、舞台上に用いる動機かつたゆまぬ努力をしている多くの生徒たちに更なる激励を与えることでしょう。皆様のご心と評価は演奏者が精進を続けていくための最も良いエネルギーとなるはずですので。この未来ある若者たちのために多くの温かい拍手をもって迎えてあげてください。

臺北市立中正高級中學 校長
簡菲莉

臺北市立中正高級中學實踐團
30週年系列音樂會 I

致辭

由衷的感謝臺北市立中正高級中學的盛情厚意讓本校首次的海外演奏修學旅行得以實現。為了這天，二年級的學生們從入學起就全副武裝的不斷準備，為了演奏會下足功夫，兩校的老師也不吝於為促成臺灣、日本兩地專攻音樂的高中生的交流而努力，這些努力的成果終於在今日披露，想必年輕人對音樂的熱情將會化為充滿能量的樂音風靡在場的各位吧。最後再次由衷感謝為了本日交流演奏會而努力的所有人，並打從心底的希望今後臺日的音樂交流更上層樓。謝謝。

ご挨拶

このたび、台北市立中正高級中学の一方ならぬご厚意により、本校初の海外での演奏修学旅行が実現しましたことに、心より御礼を申し上げます。この日のために、2年生たちは入学当初よりクラス全体で準備を重ね、演奏会の構成に工夫を凝らしてきました。両校の先生方も、台湾と日本の音楽を専攻する高校生同士の交流のために、あらゆる支援を惜しまれませんでした。その成果が、本日より披露されます。音楽にかける若い世代の熱き情熱が、ほとばしる音となって会場の皆様を魅了することでしょう。本日の交流演奏会のためにごばくださったすべての方々に感謝申し上げますとともに、今後の台湾と日本との音楽交流の一層の発展を祈念し、私の挨拶といたします。

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校長
塚原康子

Program

Trio 三重奏
Felix Mendelssohn : Concert Piece in d minor for two Clarinets and Piano
Op.114 2nd, 3rd Mov.
 孟德爾頌：d小調三重奏 作品114 第2、3樂章
 Clarinet I/山村園子・Clarinet II/櫻井慶文・Piano/河原広之

Trio 三重奏
Kasper Kummer : Concertino for Flute, Violin and Piano Op.101
 庫瑪：長笛、小提琴及鋼琴的小協奏曲 作品101
 長笛/江雅芸・小提琴/沈昌真・鋼琴/黃品澍

Two Pianos with 4 Persons 雙鋼琴
Bedrich Smetana : Rondo
 史麥塔納：輪旋曲
 Piano I/草間紀和・京谷光貞・Piano II/安野美咲・藤井博気

Trio 三重奏
Felix Mendelssohn : Piano Trio No.1 Op.49 1st Mov.
 孟德爾頌：第一號鋼琴三重奏 作品49 第一樂章
 小提琴/宮藤・大提琴/黃雨桐・鋼琴/黃品澍

Koto Ikuta 日本箏
Michio Miyagi : Sarashi-fu Tegoto (Passacaglia)
 宮城道雄：さらし風手事(帕薩卡利亞)
 日本箏高宮/森祥紗・低音/青木真子

Shakuhachi 尺八
Tozan Nakao : Asakaze (Morning Wind)
 中尾都山：朝風
 尺八/齋藤貴秀

6

東京市立中央音楽高等学校
30 部活動部活動報告

Solo 揚琴獨奏
Isaac Albéniz : Asturias(Leyenda) arr. by Liu Yuening
 阿爾貝尼斯：阿斯圖里亞的傳說(劉月寧改編)
 揚琴/林蓉姿

Nagauta Shamisen 三味線
Various "Ainote" (Japanese Traditional Themes of Nagauta)
 藤倉呂華泉：流れ～滝流し
 三味線/坂口あまね・田中湧堂

Koto Yamada 日本箏
Kinichi Nakanoshima : Hana-3dai(3 Flowers Themes)
 中能島欣一：花三題
 日本箏/風麻葉美・細田佳那

Duet 二重奏
Jacques Ibert : Entracte for Flute and Harp (from "Le medecin de son honneur")
 伊貝爾：間奏曲
 Harp/淺野華・Flute/山本英

A cappella 阿卡貝拉
Bruno Mars : Just the Way You Are
 火星人布魯諾：完美情人
 蔡信益・沈昌真・錢宇德・劉紹輝・林易辰・林詔毅
 林睿姿・華人豪・呂彥成・宮 藤・洪子涵・劉佳慧
 蔡信益改編

Two Pianos with 6 Persons 雙鋼琴
Mizuki Yanagawa : Circle of Circle
 柳川瑞季：生生不息
 Piano/岩谷優太・黒沼香恋・佐藤麻里亜・角野未來・原紗綾・平柳美乃

7

Saxophone, percussion with piano 薩克管、打擊及鋼琴三重奏
Astor Piazzolla : Libertango
 皮耶左拉：自由探戈
 Saxophone/岡嶋祥子・Percussion/北島友心・Piano/石瀨すみれ・Bass/那須野直裕

Trio 三重奏
Bedrich Smetana : Piano Trio in g minor Op.15 3rd Mov.
 史麥塔納：g小調鋼琴三重奏 作品15 第三樂章
 小提琴/朱品怡・大提琴/黃雨桐・鋼琴/林定斌

String Ensemble 弦樂合奏
Yasushi Akutagawa : Triptyque for string orchestra
 芥川也寸志：弦樂のための三樂章
 芥川也寸志：三聯畫
 Conductor/澤和樹 (東京藝術大学音楽学部員)
 Violin I/杉山和歌・河島桂花・砂原千恋・吉澤知花
 Violin II/荒井里板・岩本梨々愛・久保善枝・和田志織
 Viola/田口夕和・竹本百合子・宮澤崇・向山亜木子
 Cello/稲垣真奈・波多野太郎・吉田啓晃・Bass/那須野直裕

合奏曲
 平川加惠：台湾と日本の歌による大合奏曲
 平川加惠：台灣歌曲及日本歌曲合奏
 Conductor/澤和樹 (東京藝術大学音楽学部員)
 全體學生

8

東京市立中央音楽高等学校
30 部活動部活動報告

Felix Mendelssohn : Concert Piece in d minor for two Clarinets and Piano
Op.114 2nd, 3rd Mov.
 孟德爾頌：d小調三重奏 作品114 第2、3樂章
 德國浪漫派作曲家孟德爾頌的作品，雖然地為單簧管及巴塞管而作的曲子，但今天演出的單簧管的二重奏。
 ドイツ・ロマン派を代表するメンデルスゾーンの作協。クラリネットとバセットホルンのために作曲された作品です。当時、優れたクラリネット奏者で、彼の親友でもあったハインリッヒ・バルメント、その息子でバセットホルンの名手であったカール・バルメンが、1832年末に演奏旅行でベルリンに立ち寄った際、メンデルスゾーンに演奏会用の曲を依頼し、作曲されたものです。異国情緒あふれる激しい旋律と優しい旋律の対比に注目してお聴きください。
 (2年 クラリネット専攻 福井慶文)

Kasper Kummer : Concertino for Flute, Violin and Piano Op.101
 庫瑪：長笛、小提琴及鋼琴的小協奏曲 作品101
 遠自由德國古典樂派長笛演奏家、作曲家庫瑪創作的協奏曲，另有給長笛、雙簧管或單簧管及鋼琴的版本。本曲由鋼琴先奏出旋律，再由長笛及小提琴接續，並開啓、連串的對話，旋律優美、精緻可愛。
 この曲はドイツの作曲家 Kummer が作った小協奏曲で、他にもフルート、クラリネット、オーボエ版がある。巴はピアノの開始で始まり、フルートとヴァイオリンの旋律が対話のように続き、繊細で美しい曲を展開する。

Bedrich Smetana : Rondo
 史麥塔納：輪旋曲
 史麥塔納の八手輪舞共有兩首，另一首是奏鳴曲形式。本作又被稱為「青春的圓舞曲」，是支非常親切容易的曲子。
 交響詩《我が祖国〜モルダウ》で知られるスメタナは、ベートーヴェンの交響曲第9番が作曲された年に生まれました。「チェコ国民音楽の父」と呼ばれ、チェコの独立に向けて気持ちを奮める音楽を数多く作曲しました。本作品は、スメタナが26歳の時に書かれました。その1年前には、わずか10年で別居してしまいうカレルジナと結婚しています。単純なロンド形式ですが、非常に明るく、祝祭的で華やかな作品です。幸せな新婚生活を送っている時に書かれたと思われる作品です。楽曲の随所に見られる4人の演奏者の掛け合いをお楽しみください。
 (2年 ピアノ専攻 京谷光貞)

9

Felix Mendelssohn : Piano Trio No.1 Op.49 1st Mov. 孟徳爾頌：第一號鋼琴三重奏 作品49 第一樂章

1839年、已進入創作成熟期的孟徳爾頌，寫下了這首被評譽為「貝多芬後最偉大的鋼琴三重奏」的作品...

1839年、作曲家としての成熟期に入っていたメンデルスゾーンにより作られ、シューマンから「ベートーヴェン以降、最も偉大なピアノ三重奏曲」だと評されたこの曲は全音楽章から構成される。

Michio Miyagi : Sarashi-fu Tegoto (Passacaglia) 宮城道雄：さらし風手事(帕薩卡利亞)

以元禄年間(1688~1709)深草檢校所傳的《さらし》為原曲、所謂の「さらし」是來自「布さらし」這種古時的漂白法...

1938年、作曲家としての成熟期に入っていたメンデルスゾーンにより作られ、シューマンから「ベートーヴェン以降、最も偉大なピアノ三重奏曲」だと評されたこの曲は全音楽章から構成される。

Tozan Nakao : Asakaze (Morning Wind) 中尾都山：朝風

1938年、由初代中尾都山所作、靈感來自前一年夏天在熱海療養時夏日早晨黎明時區。

1938年、初代中尾都山が作曲。前年夏、療養のため熱海で過ごした時の、夏の朝風のさわやかさを曲想に作られています。

Isaac Albéniz : Asturias(Leyenda) arr. by Liu Yuening 阿爾貝尼斯：阿斯圖里亞斯的傳說(劉月寧改編)

阿斯圖里亞斯傳奇出自西班牙民族主義作曲家阿爾貝尼斯的鋼琴作品《西班牙組曲五號》，但此曲的吉他版本更為著名...

《アストゥリアス (伝説曲)》は、スペインの作曲家・ピアニスト、イサーク・アルベニスによる曲の一つ《スペイン組曲 ('Suite Española')》の第5曲である。

Various "Ainote" (Japanese Traditional Themes of Nagauta) 藤倉呂華泉：流れ〜滝流し

出身為難子方(日本傳統樂曲中的打撃樂演奏者)的藤倉呂華泉所作的曲子、以兩支三味線表現出水滴落入水面的漸漸匯聚成大河的情景。

三味線演奏者ではなく、邦楽親子方(尺八、小鼓、締太鼓、笛を演奏する人)である藤倉呂華泉により作られました。

(2年 長唄三味線専攻 坂口あまね、田中博望)

Kinichi Nakanoshima : Hana-3dai(3 Flowers Themes) 中能島欣一：花三題

本曲融入了日本歷史性的歌歌《古今和歌集》中三首關於花的和歌，隨著和歌的不同曲調而顯著變化，是曾可以感受到日本之美約曲子。

『古今和歌集』の第10巻の「物名」から、花の名を額り込んだ「そうび(雲霞)」「まきこう(栴檀)」「しるべ(紫苑)」の三首を選びました。

(2年 山田流専攻専攻 細田佳那、里塚菜葉)

Jacques Ibert : Entracte for Flute and Harp (from "Le medecin de son honneur") 伊貝爾：間奏曲

伊克・伊貝爾是活躍於20世紀前半的作曲家。其曲之旋律往往由笛音佔以小提琴、鋼琴、鋼琴、吉他的伴奏演出。

ジャック・イベルは、1890年8月15日にパリで生まれました。幼少期から母にヴァイオリンとピアノを学び、1911年にパリ音楽院演劇科、後に作曲科へ進学しました。

(2年 フルート専攻 山本英)

Bruno Mars : Just the Way You 火星人布鲁諾：完美情人

2011年西洋樂壇最受矚目的新人王「火星人」布鲁諾於2010年發行的首張個人專輯《情歌正傳Doon-Wops & Hoogigans》...

2011年の洋楽で最優秀新人として注目されたブルーノ・マーズのデビューアルバム『Doon-Wops & Hoogigans』は2010年に発売され、第53回グラミー賞で7つの賞にノミネートされた。

Mizuki Yanagawa : Circle of Circle 柳川瑞季：生生不息

於2012年12月所作の曲目、本曲最大的特徵為演奏時演奏者以互為圓的方式圓形的移動。試著以純淨邊型與圓的聯繫、熱鬧燦爛的方式演奏，希望大家喜歡。

2012年12月に作曲されました。柳川氏は目が悪いため、普段の生活でも照明が円に見えてしまうそうです。

(2年 ピアノ専攻 原沙穂)

Astor Piazzolla : Libertango 皮耶拉：自由探戈

本曲由阿根廷出身的作曲家、班多指手風琴演奏家阿斯托爾・皮亞佐拉於1974年、為其最著名的代表作。作於皮亞佐拉為躲避國內的政治壓力、追求自由而移居意大利的時期。

「タンゴ」は、アルゼンチンのフェノスアイレスの踊りや音楽を意味します。「リベルタンゴ」の作者であり、アルゼンチンのバンドネオン奏者であるアストル・ピアソラは、従来のタンゴをもとにクラシックやジャズの要素を融合させた、独自の演奏形態を生み出しました。

(2年 打楽器専攻 北島友心、サクソフォン専攻 阿場祥子)

Bedrich Smetana : Piano Trio in c minor Op.7 3rd Mov. 史麥塔納：c小調鋼琴三重奏 作品7 第三樂章

1855年、捷克國民樂派作曲家史麥塔納，寫下了這首別名《悲歌》的鋼琴三重奏，以悼念罹難夭折的三個孩子，曲風充滿絕望與痛楚。

第三樂章 急板(Presto) 開始由小提琴與大提琴以六小節的下行導入，再由鋼琴帶出強而有力的三和弦，並在曲中加入讚美詩及送葬曲，運用對比的手法來描述以往的快樂回憶與現今失去孩子的痛楚。

1855年にチェコの國民樂派作曲家スメタナは、このピアノ三重奏に《悲歌》という別名をつけ、相次いで夭折した三人の子供たちを追悼した。曲はスメタナの絶望と心の痛みに溢れている。第3

臺北市立中正高級中學 音樂班

音樂班成員

- 【音樂科教師兼任藝術組長】 洪心怡
- 【音樂科教師兼任導師】 莊淑芬(高三)、吳雅真(高一)
- 【國文科教師兼任導師】 曾祥培(高二)
- 【音樂科代理教師】 李欣怡
- 【音樂科教師副導師】 徐敏芳
- 【音樂班書記】 黃麗芳

學生名單

- | | |
|------|--|
| 小提琴 | 朱品怡 沈昱真 洪子涵 陳知宜 陳晏妮 錢宇德 林定欽
宮 赫 簡以謙 |
| 中提琴 | 林采登 |
| 大提琴 | 黃雨桐 游承霖 |
| 長笛 | 江維芸 林易辰 賴顯帆 |
| 雙簧管 | 黃品函 劉佳懿 |
| 單簧管 | 向紫庭 張德宸 謝韻婷 |
| 低音管 | 黃麗蓉 |
| 法國號 | 留若瑜 陳柏冠 |
| 小號 | 呂彥成 |
| 打擊樂 | 林語晏 |
| 理論作曲 | 何家歡 蔡信賢 葉人豪 |
| 鋼琴 | 林睿姿 |

樂章 Presto はヴァイオリンとチェロにより始まり、そのあとのピアノによる緩めの低音で主題とし、曲中には賛美歌と葬送曲を交え、過ぎ去った楽しい思い出と我が子を失った現在の絶望的な哀しみを対比させて表現している。最後に民間で終わるのは痛みも悲しみもいつか無くなることを暗示している。

Yasushi Akutagawa: Triptych for string orchestra 芥川也寸志：弦楽のための三聯畫

芥川也寸志：三聯畫

日本の作曲家、指揮家芥川也寸志が1953年、28歳時所作の弦樂合奏曲。完成後の兩年、1955年得到了摩沙音樂獎。

芥川也寸志(1925~89)は、日本の作曲家・指揮者で、東京音楽学校(現在の東京藝術大学音楽学部)を卒業しています。歌劇、管弦楽曲、室内演奏等の他に、童謡、映画音楽、放送音楽、社歌、団体歌、成歌を作曲しています。快活で力強い作風が特徴で、中でも本作品は特に人気のある代表作です。1953年、芥川也寸志が28歳の時に作曲されました。本作品は、作曲から2年後の1955年に、ワルシャワ音楽賞を受賞しました。《交響三章》(1984)と似ている点がありますが、本作草の方がより完成度が高くなっています。

(2年 ヴァイオリン専攻 杉山氏蔵)

平川加惠：台湾と日本の歌による大合奏曲

平川加惠：台灣歌曲及日本歌曲合奏

臺灣歌曲《月亮代表我的心》和日本歌曲《ふるさと》(故郷)。將這兩首歌連結起來、透過這次相遇的夥伴們之手共同跨越「音樂之橋」。希望這份藝文活動點亮在座各位心中的暖意。

台湾の歌である《月亮代表我的心》と日本の歌である《ふるさと》を曲者の生徒全員で合奏できるよう、編曲いたしました。特殊ともいえる編成、様々な楽器のアレンジメントが織りなす響きに乗って、二つの歌が奏でられます。台湾の歌から日本の歌へ、音の架け橋がかけられ、最後には二つの歌が一つの響きの手に結集します。ここにいる全ての楽器の心に温かな灯がともりますよう祈っております。また、この作品から広がる「音の輪」が、このたびの出会いを祝福し、友情の証となるならば、これ以上の喜びはありません。

臺北市立中正高級中學音樂班 簡介

音樂是一項精緻的藝術，而音樂人才的培養更是一項精密而專門的特殊教育，音樂班的設立即針對此一需要而成立，自小學延伸至高中，以奠定培育音樂資賦優異學生的基礎。

過去臺北市已陸續設立了多所國小、國中音樂班，本校原奉臺北市教育局指示，於1985年7月辦理音樂班招生，因設備不足，籌備不及，而暫緩開辦，至1986年再奉令於7月辦理正式招生，9月始業授課，即為完成此一週而完整的特殊教育。

本校經過縝密的規劃、籌備，無論在課程、師資、設備上都有了近利和遠程的目標和理想；相信在各方督導下，必定能夠為國家培育出優秀的音樂人才。

耗資新台幣六十餘萬元興建之「藝德樓」於1987年11月落成啟用，規劃樂四、五層樓面(計千餘坪)；提供音樂班學生一個完善的學習場所。

教學設施—音樂班辦公室1間、綜合教室6間、合奏教室1間、可容納255座席演奏廳1間、個別指導琴室31間、樂譜室、視聽教室、器材室、教師研究室、會議室各1間，配置中央空調系統及電腦。

教學設備—各型平台鋼琴36台、直立型鋼琴2台、管絃樂器、國樂器、打擊樂器、視聽器材各1批，並逐年充實圖書、樂譜、各項租理及電腦軟體設備。

臺北市立中正高等學校音樂科(音樂班) 概要

音樂是精緻的藝術。而音樂人才的培養更是一件精密、專門的教育。台北市立中正高等學校音樂科(音樂班)的設立是為了提供學生這樣的機會。小學校到高級中學教育課程，才能接納的學生進修音樂的基礎。音樂的技術或知識授課。

本校是1985年7月、台北市教育局的指導下，新入生募集而設。但是，設備與準備尚不完善，因此未能如期設立而中止了。之後，改組了一貫的完全音樂專門教育。為了進行，1986年7月再次募集，同年9月開始授課。

教育課程、教師、設備など多くの面での精密な計画と準備を基に、本校は中期的、長期的な目標と理想を目指しつつ、将来、我が国に優れた作曲家や演奏家を育てることを目標に掲げる。

新台幣六千万円以上かけて建てられた「藝德樓」は、1987年11月に完成した。その中の四階と五階は音楽科の生徒達にとって良い学習環境として使用された。

学習施設：音楽科職員室1室、総合教室3室、合奏教室1室、255名収容する演奏室1室、個別レッスン室31室、楽器室、視聴教室、器材室、教師研究室、会議室各1室。すべての校舎に空調設備とエレベーターを設置する。

学習設備：グランドピアノ/36台、アップライトピアノ/2台、管楽器、弦楽器、中国の伝統的な楽器、打楽器、視聴機器を設置。また、図書、楽譜、視聴資料およびコンピュータソフトウェアなども逐次充実させている。

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校 学生名簿

Piano	安野美咲、石塚すみれ、掛谷優太、河原五志、宮谷光真、草間紀和、黒田春恋、佐藤麻里亜、角野未来、原紗綾、平柳美乃、藤井尚哉
Violin	荒井里桜、岩木梨々愛、河島桂花、久保真枝、杉山和駿、砂原三穂、田口夕莉、竹本百合子、宮澤紫、向山亜小予、宮澤知花、和田志暉
Cello	稲垣真奈、波多野太郎、吉田啓賢
Harp	浅野華
Flute	山本英
Clarinet	福井篤文、山村園子
Saxophone	阿嶋祥子
Percussion	北島友心
箏	青木真子、星麻菜美、細田佳那、森祥紗
尺八	夏輪貴秀
長唄三味線	坂口あまね、正中湧堂

東京藝術大學音樂學部附屬音樂高等學校 學校簡介

東京藝術大學音樂學部附屬音樂高等學校(藝高)是以早進行音樂的專門教育為目的,作為日本唯一的國立音樂高校於1954年設立。藉著設立至今不懈的努力,培育出了超過兩千名優秀的畢業生。這些畢業生中,除了在國際上活躍的作曲家與演奏家之外,也有不少人在大學等各音樂教育機關任教。該校有幸於2014年慶祝60週年校慶。

近年來,因為更進一步的加強了和母校東京藝術大學在音樂專門教育上的合作,本校在國際交流 and 早期教育上的意義因此更顯重要。今後也將以長遠的眼光,為日本培養足以擔任砥柱中流的音樂人才,並在進行專業和兼重並重的教育的同時,也致力於將本校教育的成果以各種形式向國外呈現。

東京藝術大學音樂學部附屬音樂高等學校 學校紹介

東京藝術大學音樂學部附屬音樂高等學校(藝高)は、音楽の早期専門教育を目的とする、日本で唯一の国立の音楽高校として、1954年に設立されました。本校はその後、今日に至るまで大きな発展を遂げ、二千人を超える優秀な卒業生を輩出してきました。その中には、国際的に活躍する作曲家や演奏家のほか、大学等の音楽教育機関で指導的役割を果たしている者も少なくありません。2014年には、創立60周年を祝うことができました。

近年は、母体である東京藝術大学との音楽専門教育上の連携がさらに強化され、国際交流や早期教育にかかわる本校の重要性は、層高まっています。今後も長期的な視野に立ち、日本の音楽文化の中核を担う人材の育成をめざして、専門と教養とのバランスのとれた教育を進めるとともに、本校の教育成果をさまざまな形で国内外に発信することに努めていきます。

～感謝～

臺北市政府教育局的指導

交通部觀光局的補助

中正高中全體師生的鼎力相助、熱情參與

中正高中音樂班家長後援會、

日本東京藝術大學音樂學部附屬音樂高等學校響和會及響翔會的全力支持

中正高中家長會的鼓勵協助

兩校老師們辛苦且用心的指導

日本交流協會及其他熱心的團體單位、師長們的共襄盛舉

傑威創意設計(文宣品設計印製)的技術支援

以及一直在背後默默關心、陪伴的師長、朋友們

最後感謝各位觀眾們的蒞臨指導,

您的掌聲是我們進步的強大動力!